

Antike und Christentum. Ergänzungsband 23, 1996. 教父などの聖書解釈について現在の研究状況と水準を示す多くの論文を含む。

意見

理論的負荷性を考慮して

清水 哲郎

篠崎氏の挑戦的な提題を評価したい。ただし、これが教父たちの聖書解釈に対する挑戦であるとするならば、不適切だと言わざるをえない。

提題において篠崎氏は〈テキストの読み〉と〈テキストの解釈〉とを区別され、前者の適否は、いわば著者がどのような意図で書いたかによるのであって、歴史的批判的な方法の成果としての理解に基づく、というような説明をされたと思う。そこから教父（ニュッサのグレゴリウス）の解釈がテキストの読みと調和しない場合に言及された。

もし、氏がテキストの読みにはある意味で普遍性があるはずだという理由で、それが不適切である場合に教父に対して批判的な姿勢をとっておられるのだとしたら、それはおかしいと申し上げたい。教父たちは現在の聖書学が前提しているような聖書の成り立ちや著者自身が書いた際の意味についての理論を決して前提していないのであって、それとは全く別の前提・理論に基づき、そうした理論によって負荷がかかった仕方でテキストを読んでいるからである。この両者の理論の違いはパラダイムないし世界像の違いであって、比較してどちらがより優れているというような評価をすることはできないのである。

もちろん私自身は現代の理論によって負荷された読み方にコミットするのであって、少なくともそういうパラダイムの中から出発することが現代を生きる以上当然であろう。教父の思想に共感する研究者といえども、現代に生き、そこで何事かを発言しようとするならば、現代のパラダイムを受け入れた上で、なおかつ教父の思想の活きる余地を探るのであれば、時代から遊離した世界に独善的態度でさ迷うしかないだろう。したがって、氏の指摘が、教父の思想と自らを単に同化してよしとしているような教父研究者に対する提言としてあるのならば、それに私も同意するものである。
